



TITLE:

今日の経済学の哲学

AUTHOR(S):

石川, 興二

---

CITATION:

石川, 興二. 今日の経済学の哲学. 経済論叢 1959, 84(4): 268-284

ISSUE DATE:

1959-10

URL:

<https://doi.org/10.14989/132701>

RIGHT:

# 經濟論叢

第八十四卷 第四號

---

|                        |         |    |
|------------------------|---------|----|
| トニーにおける宗教と經濟……………      | 出口 勇 蔵  | 1  |
| 今日の經濟学の哲学……………         | 石 川 興 二 | 20 |
| 利益計画と經營費用論……………        | 山 田 保   | 37 |
| 独占利潤の基本的源泉について(二)…………… | 重 田 澄 男 | 53 |

---

昭和三十四年十月

京都大學經濟學會

## 今日の経済学の哲学

石川 興 二

## 一

今日の経済学の課題と論理については、さきに『創造的世界経済学序説』としてこれを述べた。<sup>1)</sup>

今日の世界においては、自我的な主体が、個人として階級として国家として、原爆的な環境において対立抗争している。この世界の主体面と環境面との矛盾によつて、全人類は今や壊滅の危機に直面しているのである。この自我的な主体の対立抗争は、経済的にのみ見るも現に人類の生産力の多くを浪費しており、ために人類の大多数は依然として貧困に苦しんでいる。かくの如き世界を、平和と人類の福祉の世界に変革することが、今日の世界史的課題である。正にこれが新憲法により新日本の使命とされたところである。<sup>2)</sup>かくして今日の経済学の課題は、自我的主体の対立抗争する今日の経済世界を総ての人々が人間として生き得る「人間的世界」へと変革することである。

今日の世界の危機を激化させているものは、米ソを先頭とする世界の二大陣営の対立であるが、それは根本において今日の世界における経済の考へ方の対立である。即ち資本主義経済学と社会主義経済学の考へ方の根本的な相違である。従つてこの今日の世界において経済学を真に研究せんとする者は、両者の立場を根本的に反省しなければ

ばならない。各々の経済思想を理解すると云うことは、深くその根柢をなす哲学的思想を理解し、これよりその経済思想を根本的に理解することではなければならない。更にこの経済思想を批判するのも、その根柢となっている哲学思想を批判することによつてなされなければならない。両者の対立を止揚することも、その根本において哲学思想の対立を止揚することではなければならない。即ち経済的対立を中心として危機にある今日の世界における経済学の眞の研究は、当然に哲学的研究にまで深まらなければならないのである。かくて今日の世界的課題を解決するところの今日の経済学を確立するには、先づその哲学的基礎を確立しなければならないのである。

経済哲学なるものが我が国の学界においてはじめて問題となつたのは、大正のはじめ左右田喜一郎氏によつてであつた。この左右田哲学は、新カント派哲学の上に立脚していた。新カント派は、学問的認識は如何にして可能であるかを問題にしたところのカント哲学を継承したものであるから、それは「学の哲学」であつた。第一次世界大戦によつて生の苦しみを深く体験した人間が生を深く問題とするに至つて「生の哲学」に代つて「生の哲学」が高まつて来た。それは生の本質を明らかにしこの生の本質に基いて生を把握し生を支配せんとするものである。この立場より見れば、「学の哲学」が主題とした「学」なるものも生の働きの一面としての中に含まれるのである。ミス、マルクス等の変革期の経済学の根柢にあつた哲学は、正にこの「生の哲学」であつた。今日の経済学の哲学的基礎なるものも、「学の哲学」でわなく、この「生の哲学」でなくてはならないのである。

ここに経済学の哲学の現状を一瞥せんに、マルクス学派と対立して、経済学界を二分しているところの近代経済学は、依然スミス以来の原理即ち経済的活動の根本動機を利己心であるとする立場に立っている。例えば、その代表者の一人であるケインズは『一般理論』の最後の章『一般理論の導くべき社会哲学に関する結論的覚書』におい

て次の如くに云っている。

「その完全な達成のためには金儲けの動機も富の私有制度もまた必要であるといふような人間活動にして価値あるものが存在する。のみならず、金儲けと私有の機会が存在するために、危険な人間性癖を比較的害のない方向へ導き入れることが出来るのであつて、それらの性癖は、もしこの方法によつて満たされないとすると、残忍性とか、個人的な権力の無謀な追求とか、その他の個人的勢力扶植の諸々の形態にその捌け口を求めるに至るであらう。人が同じ暴君になるにしても彼の市民仲間に対して暴君となるよりは彼の銀行残高に対して暴君となる方が好ましい。」

かくの如き「社会哲学」は、結局自然発生の人間の利己的本能を是認する立場であつて、利己的な主体の対立抗争の世界を變革することを課題とする今日の経済学の哲学となり得ないことは云うまでもない。

同じく意識を原理として経済を説く立場に立つのもで、今日特に注意されているのは、マックス・ウェーバーの『プロテスタントの倫理と資本主義的精神』である。それは、古典経済学派が経済的活動の原動力とするものを、更にその発生の根源に遡つて明らかにせんとしたものである。このウェーバーは、その著の終りに次の様に云っている。「我々はまたプロテスタントの禁欲そのものが、その生成と特性において、社会の文化諸条件——わけても経済的条件から、どの様に影響されたかを明らかにしなければならない。何故というに、嘗て宗教的意識内容が人の生活態度、文化、国民性にあたへた影響の大いさは、通常近代人はいかに善意をもつてしても、過去の実際ほどには大きく想像し得ないのであるが、——しかし他面、偏狹な「唯物論的」文化観、歴史観に代へて、おなじく偏狹な唯心論・因果的文化観、歴史観を置かうとすることは、いうまでもなく誤っているからである。この二つともに可能であるが、しかしそのどちらもは、研究の準備作業としてでなく、結論として主張されるときには、ともに

歴史的真理を明らかにすることには役立たないのである。」<sup>5)</sup> ウェバーの意識を重んずる思想は、偏狹な唯物論に対する批判としての意義を有するが、それ自身としては今日の経済学の哲学とわたり得ないものである。

今日の経済哲学として支配的なものは、マルクス主義の哲学である。然しそれは本来のマルクスの哲学とは異なつたもので、その多くは「唯物史観の公式」を適用することをもって哲学すると考えている公式主義であり、そのロジヤ模倣はスターリンの独裁が公然と批判されて以来混乱状態に陥っている。かくてマルクス主義者自身も『現代の唯物思想』を「批判」して、「一九四五年の治安維持法の廃止は、……弁証法的唯物論の商業化をともなっていた。」また「哲学理論は政党（共産党）の理論にたいしていつでも一面的に従従するという形をとっていた。」と非難している。この著者自らもその『終章』において「わたしは、この書をまさに「観念論だから悪く、唯物論だから良い」という調子でかきすすんでいた。」と云っている。かくの如き公式主義によつて、マルクス主義が行き詰るに至つたことは当然である。かくて『戦後日本の思想』においては次の如くに云われている。

「戦後の民科の歴史というものは、思想の側から見ると、残念ですが、一言で云つて、マルクス主義の思想としての墮落の歴史だと思ふんです。ここで墮落といふのは、思想の持主が、自分の「立場」や「考え」を、根本から懷疑のルツボにたたき込んで、絶えず自分の考えを自分で破壊しては再形成する過程の重要さを忘れて、自分の立場を実体化することを指しています。」

更に『民科の断種の発想』については曰く、

「自分と意見の違うやつは、全部世界の救済をきまたげるものだ、根こそぎにしなければならん。二度とこゝろいふ哲学が出て来ないためには、こゝろいふ手を打たなければならん。そういう発想で運動が行われる。西田哲学と田辺哲学に対する批判も、近代主義批判も断種の発想で来ている。これは優生学的に、自分のみが歴史の中で生き残れる。生き残るのはマルクス主義だけだと

いう普通法則を勝手に作って来ているところから出て来た。」<sup>9)</sup>

かくて所謂マルクス主義者は屢々思想的暴力として働いた。<sup>10)</sup> かかる浅薄なマルクス主義者の思想がマルクス自身の偉大な哲学思想と異なるものであること、また西田哲学を止しく研究して今日の経済学に対するその意義を明らかにすることは、今日の経済学の哲学的基礎の確立にとって欠く可らざることである。

## 二

かくの如き経済哲学の現状においては、今日の経済学の哲学的基礎を求めることは出来ない。然らば、この哲学的基礎は、如何にして明かにし得るであろうか。それは学史的研究並に体系的研究によらなければならない。学史的な研究は、これまでの学史的発展に即してこれを明かにするのであるが、このために特に重要な意義を有する者は、マルクスである。

マルクスの卒業論文はギリシヤ哲学に関するものであった。はじめヘーゲル左派に属していた彼は、フォイエルバッハの影響により唯物論者となったが、更にこの唯物論を批判することによつてはじめて彼自身の哲学的立場を確立した。『フォイエルバッハのテーゼ』<sup>11)</sup>は、「革命の実践」の構造を明かにしてこの彼自身の立場の骨子を示めたものである。その十には「古き唯物論の立場は市民社会であり、新らしいものの立場は人間的社会 (die menschliche Gesellschaft 又は社会的人類である)」と云い、更に十一には「哲学者達は世界をただ種々に解釈して来たただけだ、世界を変革することこそが重要であろうに。」と云っている。かくて彼自身の立場は「人間的社会」の立場に立つて世界を変革することである。この「人間的世界」は後に「自由の国」<sup>12)</sup>と云われるものであって、そこ

において総ての人が人間となり得る社会である。この「人間的社会」へと資本主義社会を變革することが、彼の一生を貫徹したところの課題であつて、彼の学問研究も實際運動も総てこのためになされたのである。

この課題を解決するためになされた彼の歴史的、理論的、政策的の経済学的研究は、今日の世界的課題に最も近い課題を解決せんとした点において、またこれまでの経済学的研究の常識的なものと異なつてはじめて優れた哲学的方法の自覺に基いてなされた優れた研究である点において、今日の経済学の哲学的基礎を明かにするには、他の何れの経済学よりも重要なものである。かくて今日の経済学の哲学的基礎を明かにせんがために、先づこのマルクス経済学の哲学的基礎を根本的に明かにしなければならないのである。

このマルクスは、古典経済学が市民社会を以て本当の従つて不変的な経済社会であるとしてゐることを批判し、市民社会を成立、發展、没落の過程において明らかにすることによつて市民社会を變革する経済学を新たに立てた。然るに今日のマルクス主義者は多く、マルクスの思想を以て本当の従つて不変的なものであると云う考えに立つてゐる。然しマルクス自身の思想を真に研究するには、マルクスの研究精神に立たなければならぬのである。それはマルクスの思想をその源泉にまでさかのぼり、そこよりはじめて、マルクスの思想自身を成立、發展の過程において研究することである。レーニン<sup>13)</sup>は、マルクス思想の三つの根源としてドイツの古典哲学、英國の古典的経済学、フランスの社会主義を挙げているが、これに従つてこれまでの研究者の多くはマルクスの哲学思想の源泉をヘーゲルにおいて見んとした。なるほど、マルクスも『資本論』第一卷第二版の跋文において次の如く云つてゐる。

「私は、公然かの偉大な思想家の門人たることを承認した。……弁証法はヘーゲルの手においては神秘化されたけれども、そのことは決して、彼がその一般運動を、はじめて包括的に且つ意識的な仕方、叙述したということを、妨げはしなかつた。弁証法は彼にあっては逆立ちしている。吾々は神秘的な外皮の中に合理的な核心を発見するために、これを顛倒しなければならぬ。」<sup>14)</sup>



かくマルクスは、何よりも弁証法的な論理はこれをヘーゲルに学んだが、然しその根本的立場は、これを否定した。然らばこのマルクスの根本的な立場の源泉は、何処に求むべきか。彼は『資本論』第一巻に「等価形態」を論ずるに当って次の様に云っている。「最後に展開された等価形態の二つの独自性は、価値形態を、きわめて多くの、思惟諸形態・社会諸形態および自然諸形態とともに、初めて分析したかの偉大な研究者にまで吾々が帰つて行く *zu dem grossen Forscher zurück gehen* とき、さらにいつそう理解しやすくなる。それはすなわちアリストテレスである。」<sup>15</sup>ここにアリストテレスをもつて思惟、自然、社会のきわめて多くの諸形態をはじめて分析した偉大な研究者と云っているのは、彼がギリシャの学問思想を集成して確立し今日にまで妥当する学問的体系であるところの第一哲学、自然の学、社会の学についてであつて、マルクスの哲学的並びに社会的研究の原型の多くが、その引用のあるなしに拘らず、この「偉大な研究者」の思想より出発していることは、アリストテレスを研究することによつて、明らかとなるのである。従つてマルクスの思想は、一度この偉大な研究者にまで還り行き、ここにその原型を求めここより出発して成立的に研究することによつて、はじめて正しく明らかに理解し得られるのである。かくてマルクスを成立発展の過程において研究すると云うことは、アリストテレスにまで還りその後の発展であるアダム・スミス、ヘーゲルに即して成立的に研究すると共に、更にマルクス以後の世界的現実と思想の今日に至るまでの発展に即して発展的に研究することである。これがマルクスの学問精神によつてマルクスを研究する所以である。ことにマルクスの哲学思想はそれとしては優れているが、なお未完成であつて体系的に統一されていないから、それを全体として明らかにすることは困難であり、このためにその解り易い一面のみを浅薄に解してこれを公式的に適用する公式主義の行はれることが少なくないのである。万学の祖と云われるアリストテレスは今日も尚お

妥当する学的体系を確立したものであるから、このアリストテレスの体系的な思想に還つてマルクスを研究することは、その思想を体系的に統一することにも役立つのである。

このマルクス研究において更に注意すべきことは、マルクス自身にかえると云うことである。マルクス研究者は屢々マルクスよりも理解し易いエンゲルスを通してマルクスを理解せんとする。その哲学的能力においてはマルクスに劣りむしろ自然科学を得意としたエンゲルスは、屢々マルクスの哲学思想を、マルクスが『テーゼ』に云つているところの「古き唯物論」の方向に押しやることとなつた。かくてマルクス主義者をして「唯物史観の公式」を偏重せしむる結果ともなつたのである。またレーニン、スターリンを通じてマルクスの思想を理解せんとすることは、これをロジャ化する結果となることを免れ得ない。かくてマルクス思想を研究せんとするものは、先づマルクス自身にかえり更にこのマルクスをアリストテレスにまで遡して根源的に研究しなければならないのである。而もかくマルクスをアリストテレスとの関係において研究することは、これまで為されなかつたのである。

### 三

ギリシャは、西欧の古代として考えられるが、ギリシャにはそれ自身として古代、中世、近世の発展があつたのであり、アリストテレスの当時は、近世の崩壊期であり、個人主義的な対立抗争に行き詰つていたのである。<sup>16)</sup>この個人主義的立場を是認したものがソフィストの唯物論的立場であり、これに対立して観念論的立場に立つたものがプラトーンである。この両者を止揚して実践的な立場に立つたものが、アリストテレスであつた。かくて彼は個人主義的に行き詰まれる当時の都市国家を、総ての人間が人間たり得る理想国家に变革することを課題とし、これを解

決するために、はじめて、実践学なるものを、確立したのである。この実践学が彼の『倫理学』と『政治学』であつて、その中に経済学の基礎がはじめて置かれた。ここにアリストテレスは経済学祖ともなるのである。

今日の世界史的課題も、近世の自我的な諸主体が対立抗争することによつて行き詰れる今日の世界を、総ての人々が人間となるところの世界に变革せんとするのであるが故に、今日の世界とギリシャの都市国家とはその大さを異にするが、而もその実践的課題には相通するものがある。この点においてアリストテレスとマルクスとも相通するものがあるのである。

このアリストテレスの学問の体系は、第一哲学、自然の学、人生の学より成つてゐるが、この第一哲学のはじめに、哲学並にその他の知識の性格が規定されている。先づ知識の成立の順序が考察されるが、それは、特殊より普遍へと進み、知覚―記憶―経験―術―学―哲学である。「我々は術の人を経験の人よりもより賢明である」と考へる。経験の人は事物がかくあることを知るが何故なるかを知らない。然るに術の人はその理由を而してその原因を知つてゐるからである」この術より更に普遍的な知識が成立つ、それは「学」であつて原因自体の知識である。この「学」より更に普遍的な知識が成立する、それは哲学である。「特殊諸科学は實在の一部を切り取つてこの部分の屬性を研究するものである」が「哲学者の学は實在として普遍的に論ずるものであつて、實在の或一部を論ずるものでない」「此等諸科学はそれが取扱う研究対象たる事物の本質に關しては何等の論を与へない。……而して實在を實在として考察すること即ち實在の實在としての本質並に實在に實在として屬する屬性を研究することは、このもの（第一哲学）に屬するものである。」

以上は知識の成立の順序であるが、知識の論理的な順序はこの逆で、普遍より特殊へである。即ちアリストテレ

スにおいては、知ると云ふことは、原因によつて知るのである。即ち原因を知るならば、これから而してこれによつてこの原因に基く総ての事柄を知り得ることとなる。「総ての学は、それが対象の各に對して特定の原理及原因を求める。」ものであるが、「これ（第一哲学）は第二原理及原因を研究する学でなくてはならない。」かくて知識の論理的な順序は知識の成立の順序の逆になるのであつて、成立の順序において最後のものである哲学は最も包括的普遍的な知識であつて、成立の順序において先である科学等一切の知識を基礎づけるものとなるのである。<sup>17)</sup>

ここに述べられた哲学の本質についてのアリストテレスの考えは重要であつて、今日の哲学の考えがそれへ還らんとしているところのものである。西田哲学は次の如くに云つてゐる。「私は古來の伝統の如く、哲学は眞實在の学であると考えるのである。それはオントス・オンの学、オントロジーである。そこに哲学の本質があるのである。哲学は、その立場から、種々なる問題を考えるのである」。<sup>18)</sup> またデイルタイは『哲学の本質』において次の様に述べてゐる。哲学の総ての機能の中に存する最も一般的な性質は、所与的なものを其最後の基礎にまで溯つて、基礎付け連関付けんとする思惟の特質である。かく見られた時哲学は「最も徹底せる・最も力強き・最も包括的な思惟」に外ならない。かくて哲学すると云ふことは、*die Grundlegung, die Begründung und Zusammenfassung*「基礎を置くこと、この基礎より根拠付けること、連関付けること」<sup>19)</sup>であると云つてゐる。然らばこの基礎とは何か、それは眞實在でなければならぬ。哲学は、眞實在とは如何なるものかを究明して、そこから全ての問題を考へるのであるから、この眞実性の考への異なるによつて哲学が異り、また眞實在の考えが發展し行くにつれて哲学が發展する。このことについては、後に詳かにする。

かくてこの眞實在から經濟の諸問題を考へるのが經濟哲学である。上述のアリストテレスの論について哲学と經

経済学との関係を見んに、特殊科学である経済学はその研究対象たる實在の本質を論じないが、経済学の対象たる實在をも含む眞實在の本質を研究する最も普遍的な知識である哲学は、この眞實在から経済学をも基礎づけるものである。かくて哲学は成立の順序より云えば科学からであるが、論理的な順序より云えば哲学から科学を基礎づけるのである。かかる意味において科学が哲学を作り哲学が科学を作るとして両者は弁証法的一体に考えられる。従つて、既存の経済学を批判して新たな経済学を立てる経済学者なるものは、同時に哲学者でなければならぬ。事実マルクスは『テーゼ』において、自分の立場を述べ、「人間的社会」の立場に立つて世界を変革する哲学者としてゐる。スミスもまた哲学者であつた。

上述のアリストテレスの論は、経済学と生との関係についても教えるところがある。即ち経済学なるものは、人間の経済生活における知識から成立するところの経済的原因自体の知識であつて経済生活における知識を基礎づける経済生活を支配するところのものである。事実スミスが彼の経済学を『諸国民の富の性質と諸原因の研究』とした時、これはアリストテレスの意味する原因としての経済学を考えているのである。かくて経済的生より成立し経済的生を支配する経済学なるものは、経済的生から作られて経済的生を作るものであると云うことが出来る。ここに経済学と人生とは弁証法的に統一されることとなる。このことは経済学と政治との関係についても云われ得る。要するに、経済学なるものは、生より発し、哲学に基礎付けられて確立し、生を形成するものである。

このアリストテレスの『第一哲学』における生成論<sup>20</sup>は、経済学を含む実践学の対象たる人生的實在の實踐の本質とその実践的な研究方法を明らかにしているが、この生成論を理解せんがためには、アリストテレスの原因なる考えを一応明かにしておかなければならない。既に述べたが如く、アリストテレスは原因によつて知ると云う、また

「我々は原因を知った時、学的知識を有すると考へる。而して四つの原因がある」と云っている。この四つの原因は、目的因、形相因、質料因、動力因である。この四つのものは人間の実践において最も具体的に明らかにされる。即ちそれにおいては、何のために（目的因）、何を（形相因）、何から（質料因）、何によつて（動力因）と云うことを問ひ得る。例へば、住むために、家を、木から、労働によつて作る。この実践の四要因なるものは、アリストテレスにおける根本的な範疇であつて、実践においてのみならず、作られたものの自体についても用いられるのである。

扱て生成には、自然的生成と人間の生成とが區別される。前者は犬が犬を生むと云うが如くに一筋の実現の過程であるが、人間の生成即ち実践は実現の過程の前に思惟の過程があつて二段よりなる。例へば医者（主体）が病人（客體）に対し、これを健康にするために（目的因）、先づ健康と云わるべき状態（形相因）の何であるかを知らなければならぬ。次にこの健康な状態を（形相因）、それによつて実現する方策（動力因）を知らねばならないが、このためには健康の実現が何に依拠するかを知らねばならない。例へば冷えている患者が一定の体温を与えられた状態が健康であるとすれば、この状態が何に依拠するかを知らねばならない。それが患者の血行を旺んにすることに依拠することを知れば、更にこのことが何に依拠するかを知らねばならない。それが患者を摩擦することとに依拠することを知るならば、これは医者が自分の手で患者に実施し得ることである。かく健康な状態の実現がそれに依拠する諸段階を順次に求めて「彼が施行し得るところの最後の段階」に到達するまで「思惟の連鎖」を進めて行かなければならない。ここに思惟の過程は完了する。この思惟の過程の最後の段階より実行の過程が始まる。この最後の段階は彼が実行し得るものであり「潜在的に存在する」ものであるが故に、これを彼の力によつて実現するならば、既に知られた依拠の諸段階が、その逆の順序において順次に実現せられ遂に健康の状態が実現される。

に至るのである。即ち医者の働きによつて（動力因）、思惟された健康の状態を（形相因）患者から（質料因）実現して、健康体（新な実体）が作り出され、而してそのためにこのことがなされた医師の目的因も充足されたのである。かく人間の生成即ち実践においては行為者たる人間と所与的なものとが存在して、先づ思惟の過程が進められ、然る後これが実行に移されて実現する。かくて医師の意識にあつた健康から現実の健康が実現する。<sup>24)</sup>

この思想をマルクスが如何によく摂取しているかは、彼が『資本論』において「労働過程」を説明するに当り、正にこのアリストテレスの自然的生成と人間の生成の區別を原型としていることによつて知られる。曰く

「蜘蛛は織物師の作業に似た作業を行い、また蜜蜂はその蠟製の巢の建築によつて幾多の人間建築師を赤面させる。だが、最も拙劣な建築師でも最も優秀な蜜蜂よりはじめから優越している所以は、建築師は巢を嚙で建築する前にすでにそれを自分の頭の中で建築しているということである。労働過程の終りには、その初めに当りすでに労働者の表象のうちに、つまりすでに觀念的に存在していたものが結果として出てくる。彼はただ自然的なものの形態変化を惹き起すだけではない、彼は自然的なものうちに・同時に彼の目的を―それは彼の意識しているところの・彼の行為の模式及び仕方<sup>21)</sup>を法則として規定するところの―そしてそれには彼れが自分の意志を従属せしめねばならぬところの・彼の目的を―実現するのである。」

アリストテレスは、この実践論に基いて、実践学を立てているのであるが、かくアリストテレスの実践論の精神をよく摂取したマルクスは、アリストテレスの実践学を原型として経済学を立てたのである。このことを明かにするために、先づアリストテレスの、『倫理学』と『政治学』の実践学としての性格を一応明かにしよう。

彼は前述の知識論において「健康についても又善き状態についても原因なるものがある。……一般に推論的であり、又は少しでも推論を含むところの総ての科学は一般に諸原因及び原理を論ずるものである。」と云っているが、

実践学は正しい目的を到達するための正しい知識を求めるものであって、『倫理学』は人間についての、『政治学』は人間の社会生活についての善き状態並に原因を研究する学である。アリストテレスは『政治学』のはじめに曰く「吾々の見るように、総ての国家は何らかの共同体であり、そして凡て共同体なるものは何らかの善を目的として組織されるものであるから（全ての人間は何事でも良いと考へるもののために行ふから）、凡ての共同体は何かの善を目指しているのであるが、凡てのうちでも最高の且つ他の全てのものを包摂している共同体が、最も多く且つ凡ゆる善のうちでも最高なるものを目的としているのは明白である。そして是が所謂ポリス即ち国家的共同体である」と云っている。かくて最高善を実現する理想的な国家の実現がアリストテレスの実践学の研究目的である。故にこの実践学においては、当然に理想国家実現の四要因が明かにされることとなる。

同様にマルクスの経済学も「人間的社会」の実現を究極目的とする実践学であつて、「人間社会」を（形相因）何のために（目的因）、何から（質料因）、何によつて（動力因）実現するかを明かにしなければならない。

アリストテレスは、更にこの実践学の研究方法について次の如くに述べている。「科学の他の諸部門におけるが如く、政治学においても合成体は常に全体の簡単な諸要素又は最小の諸部分に分割さるべきである。それ故国家にあつてもそれを構成する諸分子を考察しなければならない」と云っている。かくしてアリストテレスは理想国家の実現を究極目的として、国家的全体を構成している諸要素に分析して、然る後、家族、社会、国家支配等の順において、その各々が如何にあるべきかを明らかにし、最後にこれら「全てのものを包摂している共同体」であり従つてその良き状態がこれら諸要素の良き状態に依拠しているところの国家の理想的な実現を究明しているのである。かくてここに理想国家実現の「依拠の連鎖」も明らかにされることとなつた。而してその結論において理想国家実



現の四要因が明らかにされているのである。<sup>27)</sup>

このアリストテレスの全体的なものを分析解明して再び全部にかえる研究方法を原型として同様なことが、マルクスによつて『政治経済学の方法』として述べられている。

「われわれが人口を以て始めるとすれば、それは全体に対する一個の混沌たる表象である。われわれは、より精密な規定によつて、分析的に、次第により單純な概念に到達する。表象された具體的なものからますます稀薄な抽象的なものに進んでゆき、終に最も簡單なる諸規定に到達する。ここから今や再び後方への旅が行はれ、終にわれわれは再び人口に到達する。しかし今度は、全体に対する一個の混沌たる表象としての人口ではなくて、多くの諸規定の諸關係から成る一個の豊富なる總体制としての人口である。」<sup>28)</sup>

マルクスはこの研究方法を『資本論』における経済理論の研究に適用している。「人間の社会」は、所与的な社会である市民社会から實現されるのであるから、市民社会は、「人間の社会」實現の質料因であるが、この市民社会が、『資本論』において、分析されているのである。即ちマルクスは『資本論』第一巻において市民社会を「商品」にまで分析して、この商品の分析よりはじめて市民社会の發展を、商品—貨幣—資本へと弁証法的に展開し、「資本制私有財産の最後の時が鳴る。収奪者たちが収奪される。」と云うことによつてこの巻の本論を終つているが、これははじめから「人間の社会」實現の立場に立つて、その質料因として市民社会に分析のメスを加へ、市民社会の構造のうちに「人間の社会」へ至るべき道 *Zugang* を理論的に明らかにせんとしていたからである。

かくしてここにマルクスは、アリストテレスの実践論に云う「依拠の連鎖」を明らかにせんとしたのである。故にこの發展の構造を *notwendig* と云うならば、それは *naturnotwendig* (自然的必然) ではなく、「人間の社会」

を実現するための zwecknotwendig (目的必然) であると云うべきである。但しヘーゲルに弁証法を学びとったマルクスにおいては、この「依拠の連鎖」は単に実践的でなく更に弁証法的である。

この「目的必然」の考えは、大正の終りに河上肇先生を中心として法・経の若い人々がマルクスの根本的研究をしていた時、私が先生にアリストテレスとの関聯において述べ、先生も承認されたことであつた。(その頃、先生は文学部における西田幾多郎先生のアリストテレスの『第一哲学』の演習にも出席されたことがある。) 同様に今日の経済理論は、「人間の世界」実現の立場に立つて、今日の世界に分析のメスを加え、そこに「人間の世界」への実践的弁証法的發展の構造を明らかにしなければならないのである。このことを更に明らかにするためには実践的弁証法的方法なるものを進んで考察しなければならない。

この『資本論』におけるマルクスの経済思想も、アリストテレスに還つて、その原型を求めることが出来る。即ち『政治学』における社会経済論においてアリストテレスは次の如くに述べている。最初の社会である家庭においては本源的に成員が総ての物を共有していたが故に、交換なるものはなかった。後に家庭が諸部分に分れた時、その間に物々交換が行はれるに至つた。然るに異なる地方の住民の間には、生活必需品の運搬が不便であるため、貨幣なるものが用いられるに至つた。かくして貨幣なるものが一度発見せられると、物々交換より別種の富の取得方法である商業が起つてくる。それははじめは単純なものであつたろうが、やがて「人々が経験によつて何処より而して如何なる交換によつて最大の利潤が得られるかを知るや否や」それは一層複雑なものとなる。富の獲得が常に貨幣なる道具によつてなされる結果、多くの人は、貨幣自体を富と考え誤ることとなり、富は貨幣の分量であると考えに至る。ここにおいて富の追求は無限となり、人々は限りなく貨幣を増加せんと欲するに至る。或人はこ

れをもつて人生の目的であると考へるに至る。彼等は肉体的快樂を目的とし、これが財産にかかわっている様に見えるが故に、富の取得に心を奪はれ更に不正な富の取得術が起る。即ち如何なる能力をも、その本来の用と異なつた仕方において、このために用いられるに至る。勇氣も医術等もかく用いられる。<sup>26)</sup>

このギリシャの近世末期におけるアリストテレスの経済的發展に関する思想が、近世の産業資本主義時代に生きたヘーゲルより弁証法を学んだところのマルクスによつて、原始共産体より資本主義社会に至る弁証法的な發展形態に展開されるに至るのは、けだし当然であらう。(未了)

## 註

- (1) 本誌昭和三十二年十月号三十二年二月号四月号参照。
- (2) 『教育基本法』前文参照。
- (3) Müller-Freienfels, *Die Philosophie des zwanzigsten Jahrhunderts*, S. 9.
- (4) ケインズ著『雇傭利子及び貨幣の一般理論』邦訳第四五六頁参照。
- (5) マックス・ウェーバー『プロテスタントの倫理と資本主義的精神』堀田訳第一二三頁参照。
- (6) 大井止著『現代の唯物論思想』序章参照。
- (7) 同書第二六〇頁参照。
- (8) 久野収著『戦後日本の思想』第二六頁参照。
- (9) 同書、第三七頁以下参照。
- (10) 『現代の唯物論思想』の第一九頁以下の「西田・田辺哲学への批判」も断片的な考えである。
- (11) 『ドイッチェ、イデオロギー』岩波文庫第三一頁以下。
- (12) 『資本論』青木文庫第一一五五頁以下参照。
- (13) レーニン著『カール・マルクス』岩波文庫第一六頁。
- (14) 『マルクス』青木文庫第一卷青木文庫第八六頁。
- (15) 同書第一五一頁。
- (16) 拙著『精神科学的経済学の基礎問題』第四六頁参照。
- (17) 同書、第六五頁以下参照。
- (18) 西田幾多郎著『哲学論文集第六』第一四八頁。
- (19) 拙論『デイルタイ哲学と経済哲学』本誌第三二卷第四号参照。
- (20) 拙著『精神科学的経済学の基礎問題』第一一七頁以下参照。
- (21) マルクス『資本論』第一卷青木文庫第三三〇頁以下。
- (22) Aristotle, *Politica*, 1282<sup>a</sup>.
- (23) マルクス著『経済学批判』マルクス・エンゲルス選集補巻3第二七七頁以下。
- (24) 本誌第七十九卷第三号拙稿『当時の経済学部』参照。
- (25) 拙著『精神科学的経済学の基礎問題』第一八一頁以下参照。
- (26) 同書第二〇八頁以下参照。